

2サムエル 6 章 2-8 節 「ウザの割り込み」

アウトライン

1A 正しい意図と間違った方法

1B 正しい意図 - 神の箱

2B 間違った方法 - 新しい牛車

2A 感情の高まりと混乱

1B 喜びの歌と楽器

2B 箱に伸ばす手

3A 激するダビデ

1B オベデ・エドムの家

2B 祝福の確認

本文

サムエル記第二 6 章を開いてください。今日の午後は第二サムエル記 4 章から 6 章までを学びたいと思います。今朝は 6 章 2-8 節に注目したいと思います。

2 ダビデはユダのバアラから神の箱を運び上ろうとして、自分につくすべての民とともに出かけた。神の箱は、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の名で呼ばれている。3 彼らは、神の箱を、新しい車に載せて、丘の上にあるアビナダブの家から運び出した。アビナダブの子、ウザとアヨフが新しい車を御していた。4 丘の上にあるアビナダブの家からそれを神の箱とともに運び出したとき、アヨフは箱の前を歩いていた。5 ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。6 こうして彼らがナコンの打ち場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それを押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。7 すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神は、その不敬の罪のために、彼をその場で打たれたので、彼は神の箱のかたわらのその場で死んだ。8 ダビデの心は激した。ウザによる割りこみに主が怒りを発せられたからである。それで、その場所はペレツ・ウザと呼ばれた。今日もそうである。

ダビデがついにイスラエルの王になりました。私たちは前回、ヘブロンでダビデが王になったところを読みましたが、サウルの息子イシュ・ボシェテが殺されて、それでイスラエル全部族がダビデのところに来て、「あなたが王になってください。」と言いました。それで、ユダ族とベニヤミン族の境にあるエルサレムに行き、そこをダビデの町としました。そこに王宮も建て、さらに妻や子をもうけ、王国は栄えます。

けれどもダビデは、自分の町において最も行ないたかったのは次のことです。神の箱を移し、そこで礼拝と賛美を捧げることです。ダビデの心はいつも主に向かっていました。イスラエルの国が、主からではないもので成り立つのを望みませんでした。本質的にはダビデが王ではなく、主なる神ご自身が王であり、王ダビデ自身もこの方にひれ伏して生きていきたかったのです。それで、今読んだ箇所のように、バアラあるいはキルヤテ・エアリムと呼ばれる町から神の箱を運び出したのです。

1A 正しい意図と間違った方法

1B 正しい意図 — 神の箱

ダビデが神の箱が近くにあるのを願ったのは、まさに主の臨在、神が自分におられることを願ったからでした。モーセの律法には、神の箱の中に十戒に板が安置して、純金で作った贖いの蓋を載せなさいと命じています。その蓋にはケルビムという、天の御座のそばで神を礼拝している天使ケルビムを彫るように命じられています。そして、主がこう言われました。「わたしはそこであなたと会見し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。(出エジプト 25:22)」主が語られるところです。そして新約聖書の最後の書物、黙示録では、神の箱はまさに天におられる神の御座そのものを表していることを教えています。

ダビデが、主が持っているもの全てを欲しいと願いました。アイドルのファンが、そのアイドルのすべてを自分のものにしたいと拝むように、まことの神である主が彼にとって全てだったのです。

キリストに与った者は、みなこの願いを持っています。イエスを信じる者は、新しく御霊によって生まれます。神の霊によって、自分の霊が新しくされます。したがって、もはやこの世のものではなく、神に属する者になったことを知っています。故郷は地上から天に移されています。自分の願いはただ主イエスであり、この方に見える日を待ち焦がれています。ですから、新しく生まれたクリスチャンは、礼拝が好きになります。まだ天国に入っていませんが、神の霊によって、また神の真理によって、天国の前味を礼拝賛美の中で味わうことができるのです。

ダビデは、大きな歌声や楽器によって神の箱を進めていきますが、それはまさに天に引き上げられた教会が行なうことです。天には立琴があります。新しい歌があります。例えばこうやって、主イエス・キリストに対して歌っています。「あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。(5:9-10)」そして無数の天使が出てきました。そして大声でこう叫んでいます。「彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。(5:12)」

そしてダビデは、自分が王であることを自覚しています。ですから、自分の町に神の箱を持って

いくということは単に、自分自身が主を礼拝したいという願いだけではなく、イスラエルの民が神の箱を中心に、つまり主ご自身を中心にして生きるようにさせたいという思いがあったはずで、自分に与えられた王という職分、あるいは賜物を用いて、イスラエル全体の益になるべく動いています。同じように私たちはキリストの体であり、自分自身が神をあがめることを強く願っているだけでなく、神の恵みによって与えられた賜物を用いて、教会全体の益のために分かち合いたいという思いを持ちます。「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。(エペソ 4:16)」

2B 間違った方法 — 新しい牛車

ですから、ダビデが神の箱をエルサレムに運ぶことについて、これは素晴らしい願いであり、ところが、ここの出来事には一つ大きな問題があります。それは何でしょうか？ 3 節に「**彼らは、神の箱を、新しい車に載せて、丘の上にあるアビナダブの家から運び出した。**」とあります。牛車がありますが、「新しい車」とあるように、ここにもダビデの思いがあります。主に対して、つまらないもの、欠陥のあるものをささげるのではなく、最善のものをささげたいと思っています。けれども、やはりここには大きな問題があるのです。

それは、運び出す手段です。律法の中には、はっきりと神の箱、契約の箱を運ぶ方法が指示されていました。出エジプト記 25 章 12-15 節には、こうあります。「**箱のために、四つの金の環を鑄造し、それをその四隅の基部に取りつける。一方の側に二つの環を、他の側にほかの二つの環を取りつける。アカシヤ材で棒を作り、それを金でかぶせる。その棒は、箱をかつぐために、箱の両側にある環に通す。棒は箱の環に差し込んだままにしなければならない。抜いてはならない。**」ちょうど神輿のようにして運ぶのです。箱の両側に環があり、そこに棒が通して、棒はいつもそのままにしています。そして運ぶ時にその棒で神の箱を担ぐのです。

なぜ、このように運ぶのか？ その理由は聖書にはっきりと言われているわけではありませんが、担ぐ人が神の聖なる臨在を自分たちの思いの宿すことであろうと思われ、礼拝を他人任せではなく自分自身が心に抱いて行っていくことであろうと考えられます。私たちが共に主を賛美する時、共に御言葉を朗読する時、代表する人が祈る時、また献金する時も、一つ一つが天の御座におられる主を心に宿しながら行うのです。

さらに、契約の箱を担いで運ぶ人も誰でも行なって良いものではありません。民数記 4 章 15 節にこうあります。「**宿営が進むときは、アロンとその子らが聖なるものと聖所のすべての器具をおおい終わって、その後ケハテ族がはいて来て、これらを運ばなければならない。彼らが聖なるものに触れて死なないためである。これらは会見の天幕で、ケハテ族のになうものである。**」主がレビ族をご自分に奉仕する者として選び、任命されました。そのレビの部族の中に三つの氏族がいましたが、ケハテ族が聖所の器具を運ぶことが命じられていました。

ヘブル書5章4節に、祭司職について「**ただだれでも、この名誉は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。**」とあります。ボランティアのように自分で推薦して行うものではなく、神に召されている、つまり主にしなさいと命じられてその呼びかけに応答することによって奉仕をします。その召しにこそ聖別があるのであり、聖なる器具に近くいても滅ぼされることのないように神が守っておられるのです。

まず、クリスチャンになること自体が、神の召しに応答して聖なる者とされていることを意味します。「**神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。(ローマ 8:30)**」「**しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。(1コリント 6:11)**」

本当の意味でクリスチャンになったという人は全て、神の語りかけを受けてそれに応じたからクリスチャンになっています。自分の周りにクリスチャンが多いから、だから私もクリスチャンだ、ではありません。他の人にクリスチャンになることを勧められたからクリスチャンになりました、という動機でもありません。自分が一生懸命教会に通って、聖書も読んでいるからクリスチャンだ、ということではありません。ただ一つ、神からの内なる声を聞いて、聖書の言葉を通して、何らかの形で悟り、理解が与えられ、それで心と思いをイエス・キリストに捧げようとしてクリスチャンになっています。そうして、そのように応答した人を神は聖なる者としてくださり、この世からの聖め、また聖なる神のおられる天に入ることのできる、最終的な聖めを与えておられるのです。

同じように、私たちが具体的に神に仕えることにおいても、「**神に言われたから**」という理由があって初めて奉仕をすることができます。ボランティアではありません。まず神に祈ります。そして平安が与えられています。または、神に仕えていて肉体的には大変かもしれない、また精神的にも大変になるかもしれない、けれども霊においては確かに主が自分を守ってくださるという確信が、そうした肉体や精神的なものを超えて与えられています。このことを使徒パウロは、神の恵みからの賜物だとしてこう話しています。「**私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。(ローマ 12:3-5)**」

したがって、ダビデとイスラエルの人たちの誤りは、その心と意図ではありませんでした。主を礼拝したいという思いは何物にもまして優れていました。けれども、手段と方法が間違っていたのです。彼らはどこから、牛車によって神の箱を運ぶという発想が出てきたのでしょうか？

サムエル記第一 6章 11節を読みます。「**そして主の箱を車に載せ、また金のねずみと腫物の像**

を入れた鞍袋を載せた。」同じことを行っていた人々がいました。ペリシテ人です。かつて、ペリシテ人とイスラエル人の戦いで、イスラエル人が神の箱を戦場に持って来ました。そしてペリシテ人が神の箱を奪い去りました。ところがペリシテ人の町において腫物の災いが下りました。そこで彼らは神の箱をイスラエルに返そうと思ったのです。その時に彼らが行なったのは、牛の車に主の箱を乗せて運ばせることでした。

ダビデとイスラエルは、知らず知らずのうちに、ペリシテ人の他の神々に対する礼拝方式を受け入れていたのです。イスラエルは周囲の異邦人に取り囲まれています。したがって、自分たちの信じる神は、その異教の慣わしによらず、モーセを通して与えられた神の律法によってのみ拝まねなければいけません。けれども、聖書の中にはっきりと神の箱の運び方が指示されていたのにも関わらず、彼らはその知識があっても適用するのを忘れていて、ごく自然に周囲にある慣習に従ってしまっていたのです。

同じように、私たちは心が神に向けられているだけではなく、方法も神によって定められた方法で行なわなければいけません。「熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はずまずく。(箴言 19:2)」とあります。ここでの「知識」は単に知的に理解しているということだけでなく、体験的な知識、つまり実際の適用において運用できる知識です。そして心は主に対して熱心であるけれども、その知識なしに出発してしまうと、途中でつまずいてしまうのです。

ですから、自分が慣れ親しんでいるものを捨てて、新しい習慣、主が与えられている習慣を身に着ける必要があります。イエス様は、ユダヤ人やバプテスマのヨハネの弟子たちにこう言われました。「だれも、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんな継ぎ切れは着物を引き破って、破れがもっとひどくなるからです。また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます。(マタイ 9:16-17)」古い着物には新しい継ぎはできません。古い皮袋には新しいぶどう酒を入れることはできません。(新しいぶどう酒は気体が出てきます。古い皮袋は硬直しているので裂けてしまいます。)ですから、新しい皮袋、新しい着物に取り替ええないといけないのです。

2A 感情の高まりと混乱

ですから次の衝撃的な出来事が起こります。運んでいた者のひとり、ウザが死んでしまいます。

1B 喜びの歌と楽器

5節には、「ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。」とあります。ここだけを見ていると、何とすばらしい光景でしょうか！けれども、もう私たちは今知っています。表面上はすばらしい賛美なのですが、ペリシテ人方式が肝心の神の箱に対して採用されているのです。表面上はすばらしい音楽と歌を

捧げることはできても、それが世的になっている場合があるのです。

表面上だけになっている時に、主のストップがかけられることがあります。ダニエル書には、美しい楽器の音色によって一つの礼拝が行われている場面が出てきます。「あなたがたが角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハーブ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝め。(3:5)」これはさぞかしすばらしい音楽だったことでしょう。世界一流の音楽家たちが奏でる交響楽団による演奏です。ところが、ユダヤ人の三人、ダニエルの友人たちは拝みませんでした。これが王ネブカデネザルの気分を一気にぶち壊しました。全体の一致がこれで損なわれたと感じたのです。その礼拝対象が間違っているのですから、その一致に冷や水が浴びせられるのは仕方のないことなのです。

2B 箱に伸ばす手

ここでも感情的に高揚している時に、冷や水が浴びせられました。6節を見てください、「こうして彼らがナコンの打ち場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それを押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。」打ち場とは、脱穀をするところです。そこに石でもあったのでしよう、神の箱が倒れそうになりました。それで倒れたらいけないと思って、手を伸ばしたのです。

彼の行動は正しかったでしょうか？神の箱が倒れてしまうのを何とか食い止めることは、咄嗟の行動として何の問題もないでしょう。自分で何とかしなければいけない、と思いました。けれども、その正しさが神の前では大きな罪だったのです。先ほど読んだ民数記4章15節にこう書いてあります。「彼らが聖なるものに触れて死なないためである。」契約の箱に触れること自体が、聖なる神のご臨在そのものに介入することであり、不完全な者はたちまち滅んでしまうのです。そこで、7節に「すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神は、その不敬の罪のために、彼をその場で打たれたので、彼は神の箱のかたわらのその場で死んだ。」とあります。

そこでこの場所が、「ペレツ・ウザ」つまり「ウザによる割り込み」と呼ばれました。主がご自身の聖なることを現しておられるのに、そこにウザが割り込んだということです。

「自分で何とかする」・・・これは、確かに聞こえは良いかもしれませんが。しかし、私、また私たちがちのが、というようにしていくと、人間本位の礼拝奉仕になっていきます。私たちの信じている福音は徹頭徹尾、聖なる神に服するものです。福音は私たちのために与えられたものではなく、神の福音であり、神の栄光のために与えられたものです。そしてキリスト者の救いも、私たちが神を選んだのではなく、神が私たちを選ばれて実現しました。そしてキリスト者としての働きは、先に説明しましたように、自己推薦するものではなく神の召し、神の任命によるものです。そして、私たちが仕えているのは主に対してであり、人に対するものではありません。

私たちがしなければいけないことは、ひたすら「主が何と語っておられるのか？」ということです。

聖書にどう書いてあるのか？聖書的な解決法は何なのか？そして、その方法に自分を服していくことであり、解決は自分たちでもたらずのではなく、主がもたらしてください。

3A 激するダビデ

そしてダビデの心は激しました(8 節)。混乱していたのです。主にあって大いに喜んでいるのに、どうしてこのように主からの怒りが発せられてしまったのだらうという混乱と困惑であります。心は純真なのに、突然、どうしてこんなことが起こっているのか？と分からなくなる時が私たちにもあるでしょう。では、ダビデはどのようにしたかを見てみましょう。

1B オベデ・エドムの家

彼は、まず主を恐れました。9 節で「**主の箱を、私のところにお迎えすることはできない。**」と言っています。主にあって静まることから始めます。

そして冷静に考えれば、レビ人のケハテ族によって契約の箱は運ばれなければいけないことを彼は知りました。「**オベデ・エドムの家(10 節)**」とありますが、彼はガテ人と呼ばれており、ケハテ族の住むレビ人の町出身であることが分かります(ヨシュア 21:25)。ダビデは確かに聖書の中にケハテ族の者が運ぶのだ、ということを確認したのです。

2B 祝福の確認

そしてダビデは、さらに様子を見ました。11 節を見ると、三か月、オベデ・エドムの上に神の箱がとどまっていた、とあります。主に命じられていることを行なってみて、これで主がどう考えておられるのかどうかを確認するために、待っていたのです。主がどのように考えておられるのか、この静かな期間を持つことはとても大切です。

こうやって主の新たな祝福によって、神の箱を運ぶことができます。13-15 節を読んでみます。「**主の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上った。(2サムエル6:13-15)**」なんとすばらしい賛美が出来たことでしょうか！

ですから、主が何を語っておられるのかを聞く時まで、待っていきましょう。そしてそれに従い、主が祝福されることを期待していきましょう。「**主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。(詩篇 37:7)**」